

## 名古屋城 元御春屋門の発掘調査

酒井 中（株式会社パスコ東日本事業部）

### はじめに

近世城郭は日本全国各地に分布し、史跡整備事業によって石垣の補修・復原工事が盛んに行なわれている。その中でも尾張名古屋城は江戸幕府の開府以降に築かれた、近世城郭の中でもどちらかといえば新しい、言い換えれば戦国時代の築城技術の集大成ともいえるものである。その名古屋城においても、本丸搦手馬出部分（図1）の石垣の解体修復工事が進行中である。本稿では昨年解体を終えた元御春屋門北側石垣の解体調査について報告するものである。

### 地理的・歴史的環境

名古屋城は名古屋台地の北西縁辺に位置し、城の北西に濃尾平野を望む。名古屋城および城下町の基盤となったのは東南方向に位置する名古屋台地である。その西縁に沿って南北にのびる運河は、慶長16(1611)年頃福島正則指揮のもと開削された。のちに堀川と呼ばれる、こ

の人工河川は交通・流通・雨水の排水など、近世名古屋城下において重要な水環境を提供している。名古屋城の普請は、徳川幕府により計画され、外様大名に命じられた。慶長15(1610)年には、將軍秀忠から正式に普請命令が発せられた。助役諸大名（表1を参照）は同年閏2月末には普請に着手していたものと思われる。同年5月に縄張りが完了、6月には石垣根石工事がはじまったとされる。この時点で堀の掘削・盛土などの基礎土木工事がすすみ、堀や壘・枳形などの形がおおよそ出来上がっていたと推測される。石垣工事に先駆けて、採石地の調査と決定、石材の輸送、普請小屋や集積場の設置、作業員の確保が準備されたものと考えられる[高田1999]。加藤清正が担当した天守台は、早くも同年8月27日に竣工しており、他の大名も9月末には本丸・二之丸・西之丸・深井丸をほとんど完了、12月中には残りの部分も完成をみたという。

明治維新後は、城域全体が主に陸軍の管轄下に置かれた。明治26(1893)年から本丸と西之丸は宮内庁に移管され「名古屋離宮」として使用されている。昭和5(1930)年に離宮部分は名古屋市へ下賜され、第二次世界大戦時には、天守閣をはじめとした本丸主要建物を消失したもの

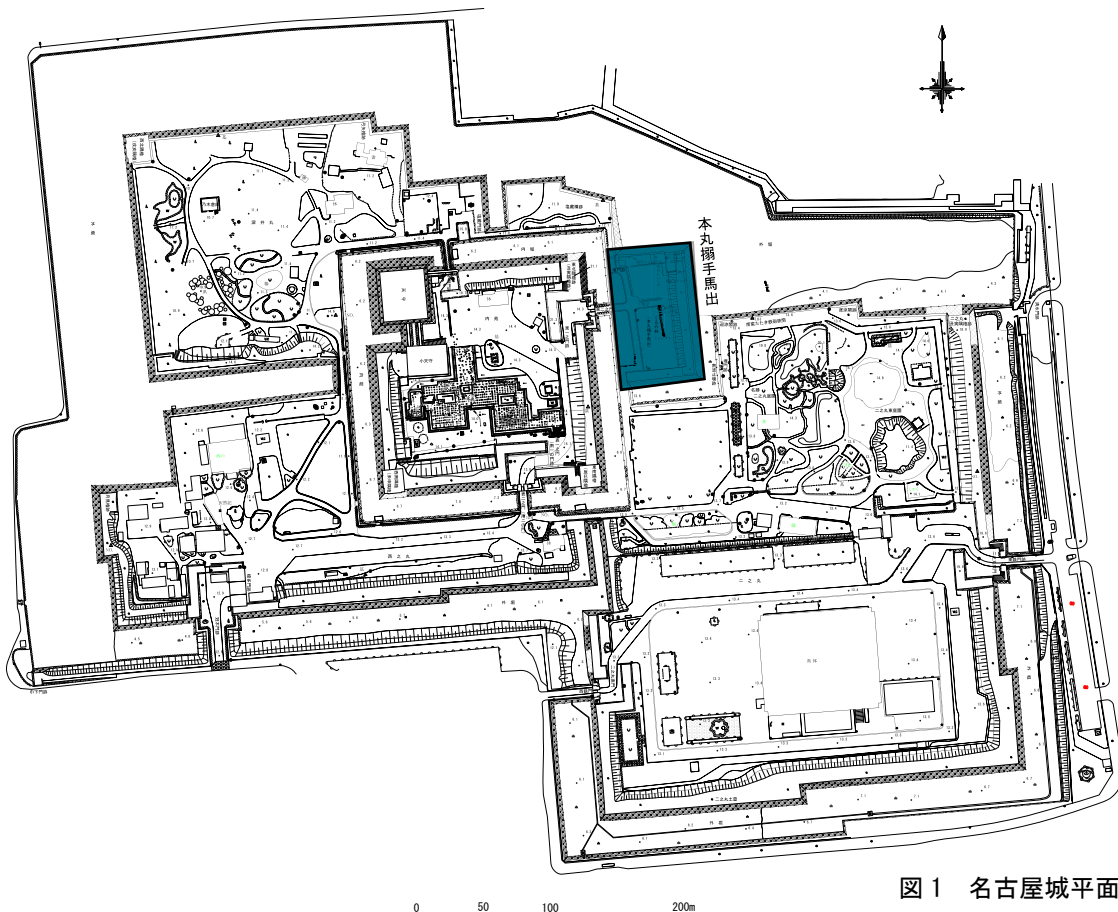


図1 名古屋城平面図

No.	大名	通名	領国・居城	石 高	割当坪数
1	前田 利常	松平筑前守	加賀・能登・越中／金沢	103.27万石	5076.72
2	池田 輝政	羽柴三左衛門	播磨／姫路	80.75万石	3413.47
3	加藤 清正	加藤肥後守	肥後／熊本	52万石	* 別個計算
4	福島 正則	羽柴左衛門太夫	安芸・備後／広島	49.82万石	1909.12
5	浅野 幸長	浅野紀伊守	紀伊／和歌山	37.42万石	1448.81
6	鍋島 勝茂	鍋島信濃守	肥前／佐賀	35.70万石	1770.72
7	黒田 長政	黒田筑前守	筑前／福岡	31万石	1537.6
8	田中 忠政	田中筑後守	筑後／柳川	30.20万石	1498.2
9	細川 忠興	羽柴越中守	豊前／小倉	30万石	1488
10	山内 忠義	松平土佐守	土佐／高知	20.26万石	773.47
11	毛利 秀就	松平長門守	長門・周防／萩	20万石	764.84
12	加藤 嘉明	加藤左馬助	伊予／松山	19.16万石	732.17
13	蜂須賀至鎮	蜂須賀阿波守	阿波／徳島	18.67万石	713.13
14	寺澤 広高	寺澤忠濃守	肥前／唐津	9.51万石	476.25
15	生駒 正俊	生駒左近太夫	讃岐／高松	8.59万石	* 池田丁場と重複
16	稲葉 典通	稲葉彦六	豊後／臼杵	5万石	248.7
17	金森 可重	金森出雲守	飛騨／高山	3.84万石	189.4
18	木下 延俊	木下右衛門太夫	豊後／日出	3万石	148.8
19	竹中 重利	竹中伊豆守	豊後／高田（府内）	1.90万石	100.9
20	毛利 高政	毛利伊勢守	豊後／佐伯	1.90万石	94.3
		計		586.75万石	22383.63

表1 丁場割図に見られる大名一覧

の、戦後に大天守・小天守を再建し現在にいたる。

築城後から現在にいたる 400 年近い年月のうちには、石垣の修復や改変が何度も行なわれている。藩政期における石垣補修工事は、宝暦年間（1751～1763）の大天守台の修理をはじめ、『老中奉書』、『金城温古録』などの文献に記録されている。

明治時代以降では、明治 24（1891）年の濃尾地震による被害が甚大であった。

石垣と災害の関係および補修については、高田祐吉がまとめている〔名古屋市教育委員会文化財保護室他 2002〕ほか、現存する文書はないが陸軍・宮内庁等による補修も考えられる。終戦後も補修工事が施工されているなど、築城時の石垣がそのまま残っている部分は極めて少ない。

### 発掘調査の概要

解体した石垣は、離宮から名古屋市に下賜された際に写本がつくられた『名古屋城普請町場請取絵図』によれば、当該石垣担当大名は「鍋島信濃守」となっている（図2）。東・南・西の3方を石積で囲まれ、北側は土が剥き出しの斜面となっていた。東面・南面の石積は、現地表から約 3.5m を測る（図4）。表面観察からは、乱層積を整層積に積直したと見られ、築城後に大きな修復が行われたと考えられた。

発掘調査は、2 回に分けておこなわれた。平成 15 年度には石垣の周囲に設定したトレンチの試掘調査および石垣立面の写真測量が、平成 17 年度には石垣の解体作業に伴う背面盛土部分の発掘調査および追加部分の写真測量、解体した石材の調査がおこなわれた。

平成 15 年度の試掘開始時点には表土直下で地山が現



図2 『名古屋城普請町場請取絵図（写本）』部分（名古屋城管理事務所所蔵）

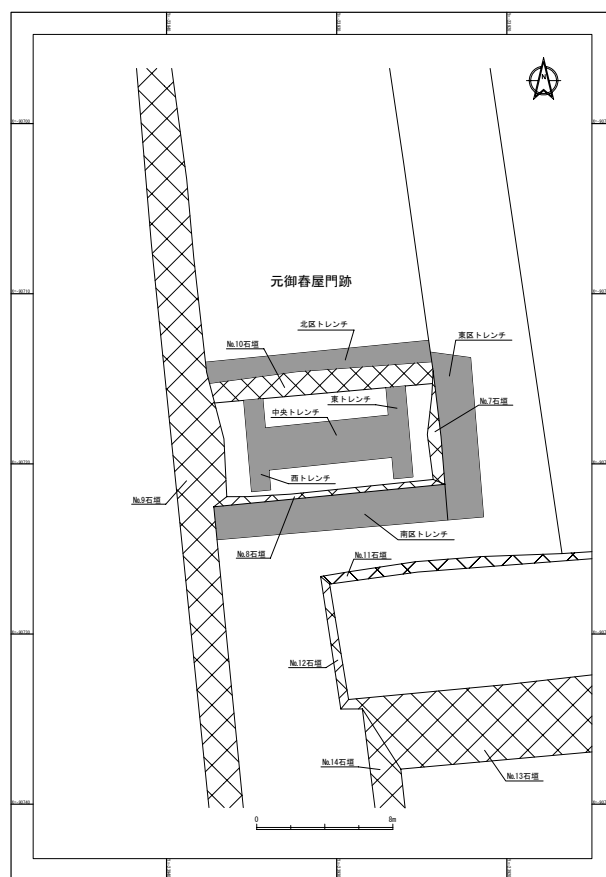


図3 トレンチ配置図

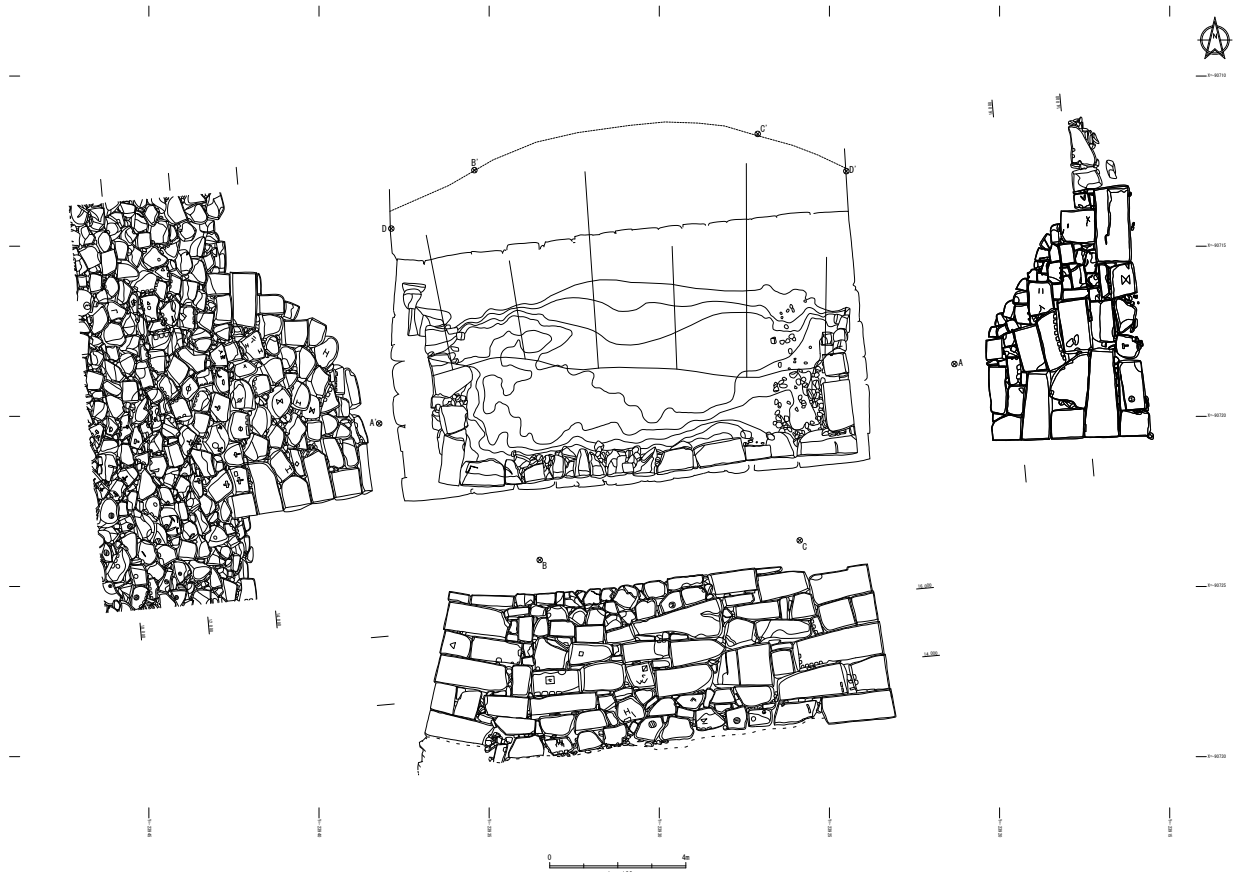


図4 元御春屋門北側石垣現況平面および石が積み立面図

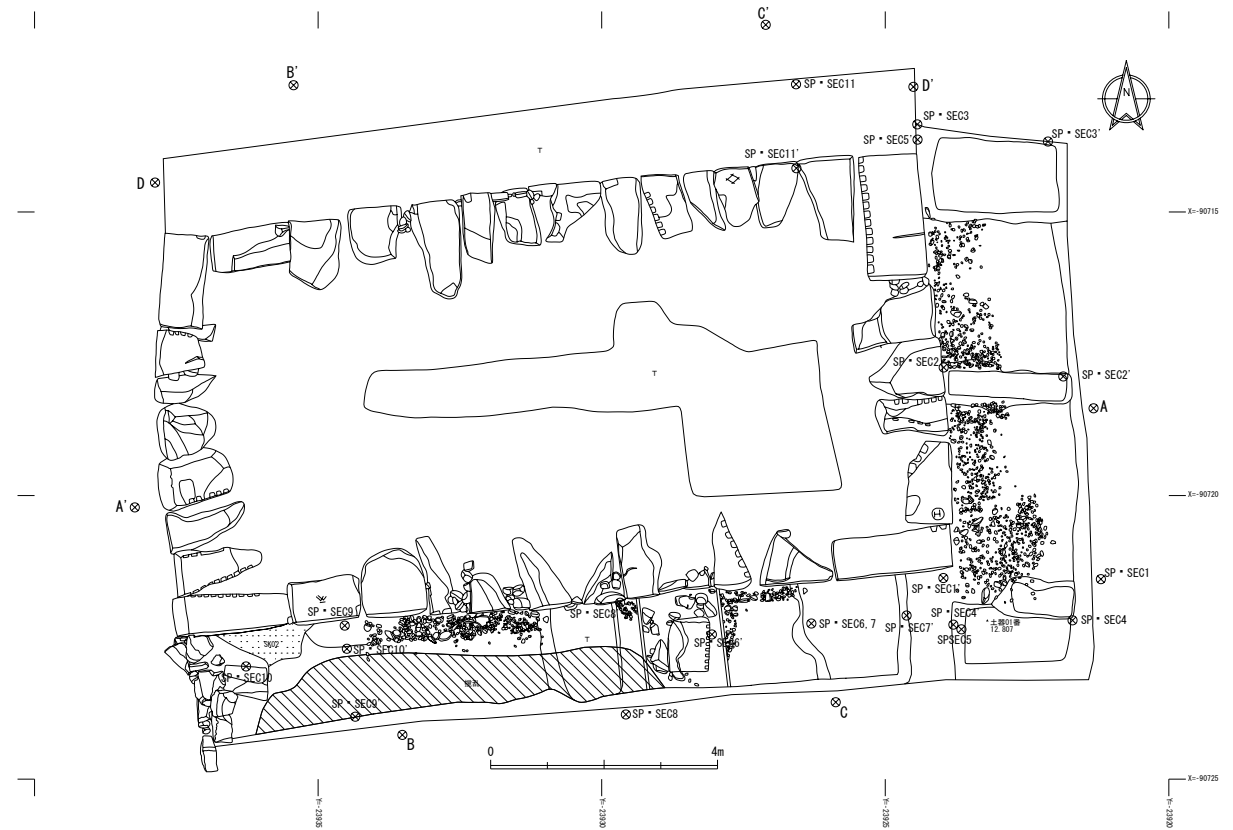


図5 元御春屋門北側石根石面および最下層平面図

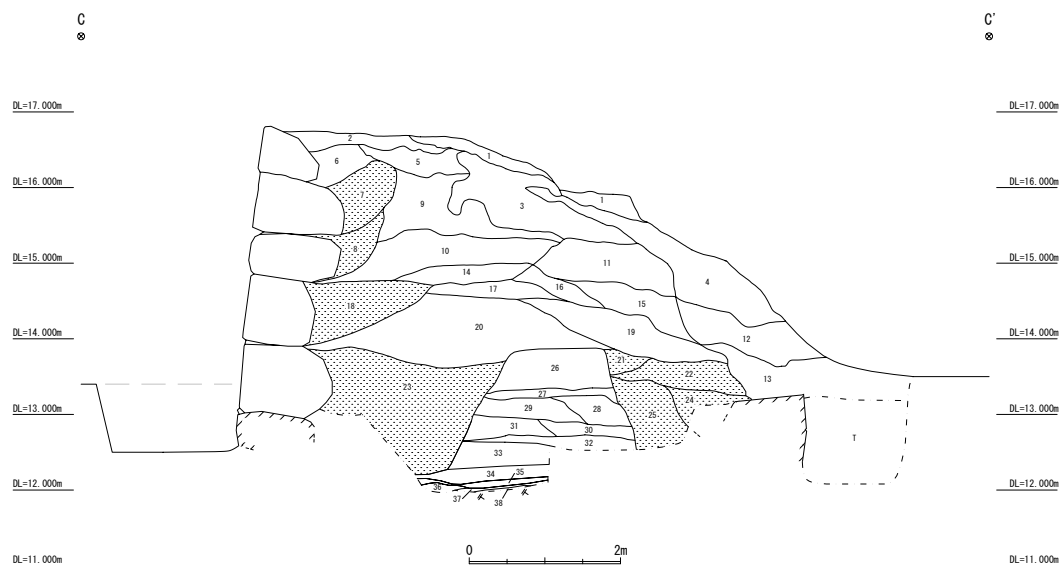


図6 東トレンチ断面図



図7 西トレンチ断面図

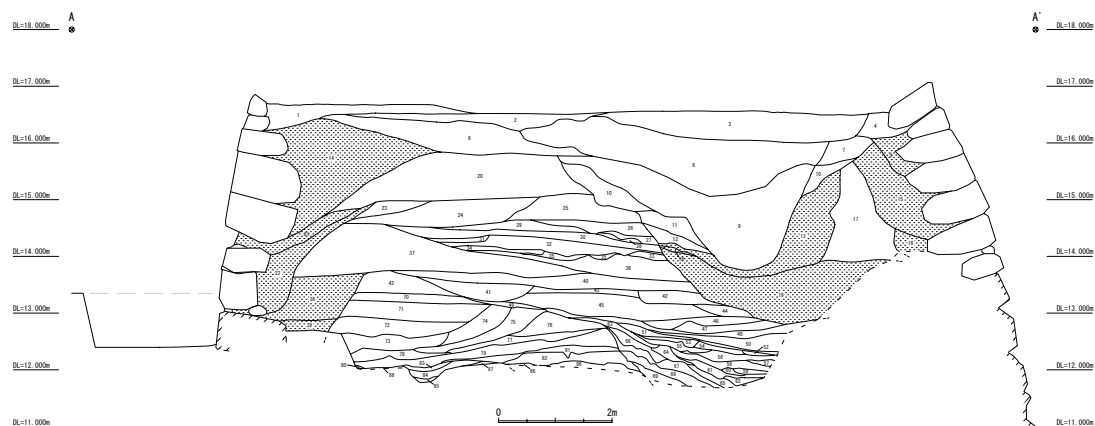


図8 中央トレンチ断面図

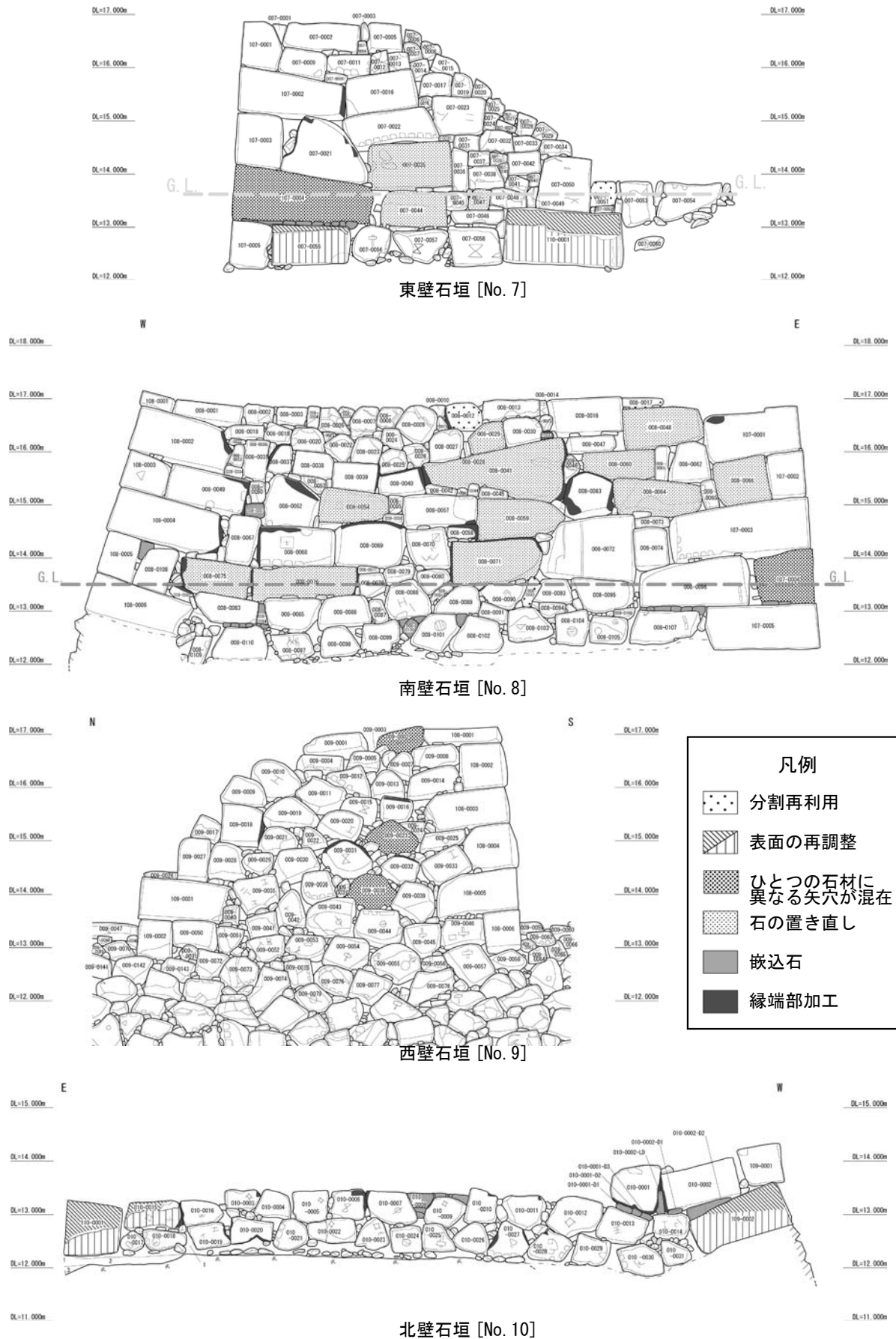


図9 石材の二次利用状況

れると想定していたが、石垣の東側・南側にそれぞれトレンチを設定し、調査をおこなったところ、整地土層のひろがり全面にわたって確認された。整地土東区トレンチでは厚さはおよそ1～1.5mにおよび、整地土層の下には地山と目される黄灰色砂質土が広がり、東西に走る1条の溝、ピット数基が検出された。これらの遺構覆土は黒褐色粘質土からなり、遺物は微細な破片が大半であるものの、中世以前の遺物で占められていた。一方、南区トレンチでは整地土面の南側は元御春屋門の南側石垣改修時の攪乱を受けているだけでなく、旧地形が西に向かって下っているのか、掘削深度限界に到っても地山はサブトレンチの一部で確認されるにとどまった。

平成17年度の調査では平成15年度に調査できなかった南区トレンチの西側部分の調査、北側石垣頂上付近に生えているムクの木の本抜根作業を並行して行なった。この南区トレンチの拡張部分で石垣の南西隅根石の確認をおこなうとともに、現状の石垣南側に広がる西面石垣の上部が積み直し、あるいは積み増しを受けていることが明らかとなった。同箇所では南面石垣の根石下端確認面まで掘削をおこなったが、地山は検出されなかった。

北側石垣に東、西、中央トレンチの3本のトレンチを設定し、重機を使用して石垣の背土部分の掘削を進めた。いずれのトレンチにおいても石垣頂上付近の背土はしまりがなく、ムクの木などによる根乱れが著しく見られ、層序が安定しない。一方、北側に傾斜した石垣の背後部分でも同様にしまりのない土が堆積し、近・現代に廃棄された瓦や陶磁器が散乱していた。これらの層を取り除くと、ややしまりを帯びたシルトと砂が互層となって版築盛土が堆積しているのが確認されるとともに、石垣の西側はムクの木の本根乱れにから下方に伸びる形で、この盛土が切られていることも確認された。東トレンチをさらに1mほど掘り下げたところで、版築盛土は粘質土が厚く盛られ、よりいっそう硬くしまりを増した。この版築盛土では砂層は見られない。盛土中から出土する遺物も中世以前のものに限られることから、石垣構築時の芯土であると考えられる。芯土の下部構造を確認するため、中央トレンチをさらに掘り下げると、非常に硬く、しまりの強い、質土により埋められた状態から、構築時の盛土によって埋め立てられている。出土する遺物は盛土部分からのものであり、溝が機能していた時期を特定できる遺物の出土は見られなかった。南面石垣の根石と地山の層位的関係を確認すべく、中央トレンチを南側へ拡張した。築城期以前の溝お

よびピット、熱田層と思われる黄灰色砂質土が確認された。この層の上面で南北に走る一条の溝とピットを数基検出した。

遺構覆土は黒褐色粘質土からなり、溝はやや黒色粘土のピットからのものにほぼ限定されるものの、いずれも微細な破片であり、器形を復元できるものは見られなかった。遺物は、芯土部分からは須恵器・古代瓦・山茶碗・中世陶磁器が出土している。最下層の出土遺物は、黒褐色土のピットからのものにほぼ限定されるものの、いずれも微細な破片であり、器形の復元できるものは見られなかった。

### 石材調査

平成17年度に元御春屋門北側石垣発掘調査にともない解体された石垣石材はのべ323点におよぶ。調査の一環として、解体した石材の肉眼観察による岩石種類の同定、石材の法量計測、石材の配置状況、加工状況、刻印を記録した。解体の対象から外れ、現地保存された石材については岩石種類の同定は未実施であるが、表面部分の法量計測、石材の配置状況、刻印の記録採取を実施している。

解体した石垣石材については、肉眼観察の結果、閃緑岩および花崗閃緑岩、花崗岩が全体のおよそ75%、砂岩が18%を占めており、主要な石材として用いられている。石材の大部分は高田祐吉氏の研究により愛知県三河湾沿岸で産出する、いわゆる幡豆石と考えられる。石垣の修復時に用いる新補石材の確保のためにも、石材の産地同定作業は欠かせない。

解体した石材は間詰石を除く213点に関して言えば、重量は最小のもので10kg、最大で6.3tにおよび、平均すると、1点あたり約711kgを数える。そのうち天端石は31点を数え、横積が18点、縦積9点、落積が4点を数える。重量は20kgから1.6tにおよぶが、平均約360kgと比較的小ぶりなものが使われている。解体した石材のうち、築石および角脇石は111点を数え、10kgから4.2tにおよび平均すると、1点あたり約620kgである。配石方法としては横積110点、縦積31点、縦積あるいは逆積1点、逆積1点、落積1点からなる。下の方に行くほど大型のものを使用する傾向にある。隅角石は32点を数え、重量は最小で700kg、最大で6.3tにおよび平均で2.6tである。平均すると表面縦長は約400mm、同横長約850mm、裏面縦長約330mm、同横長約810mmと

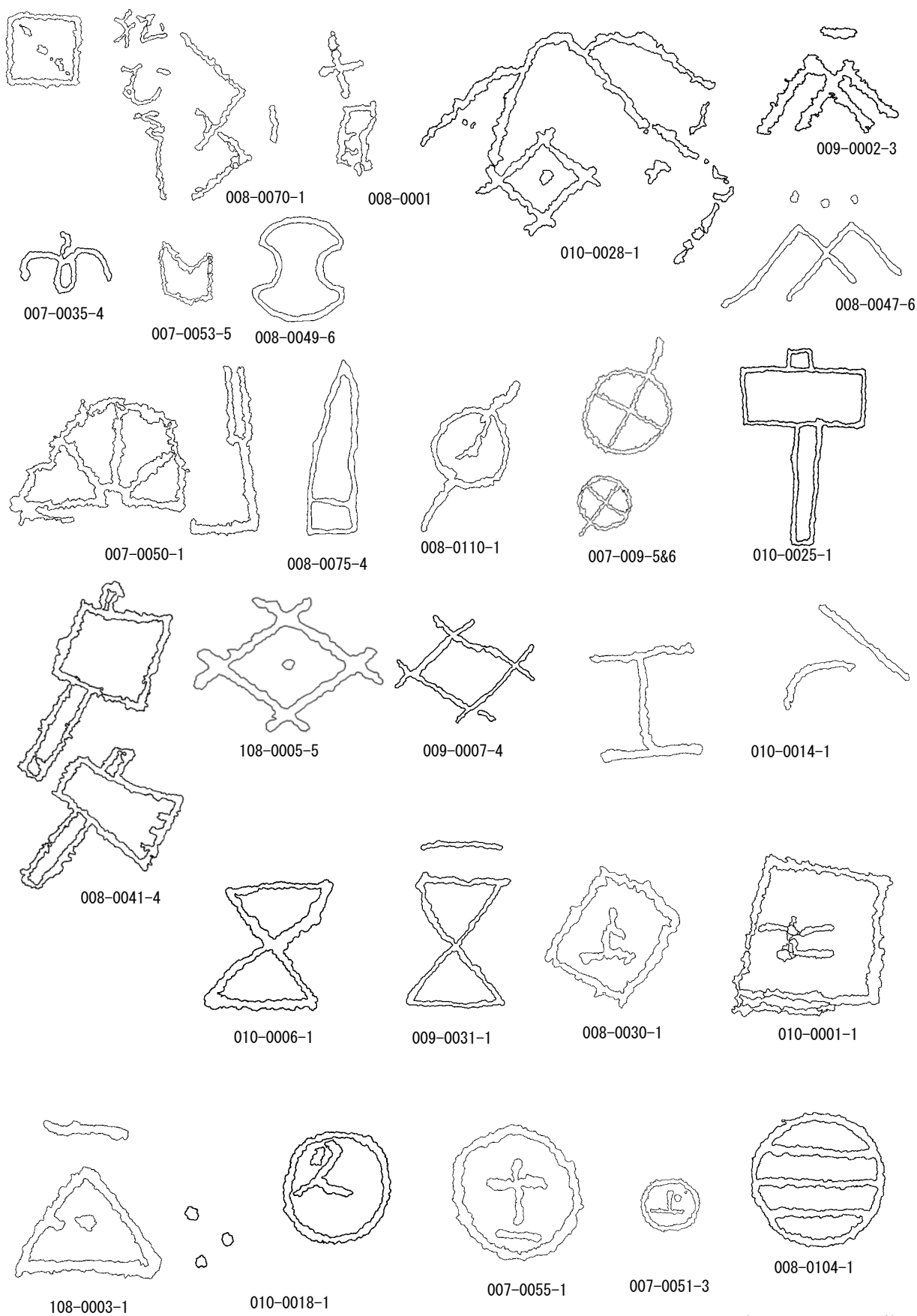


図 10 主要な石材刻印



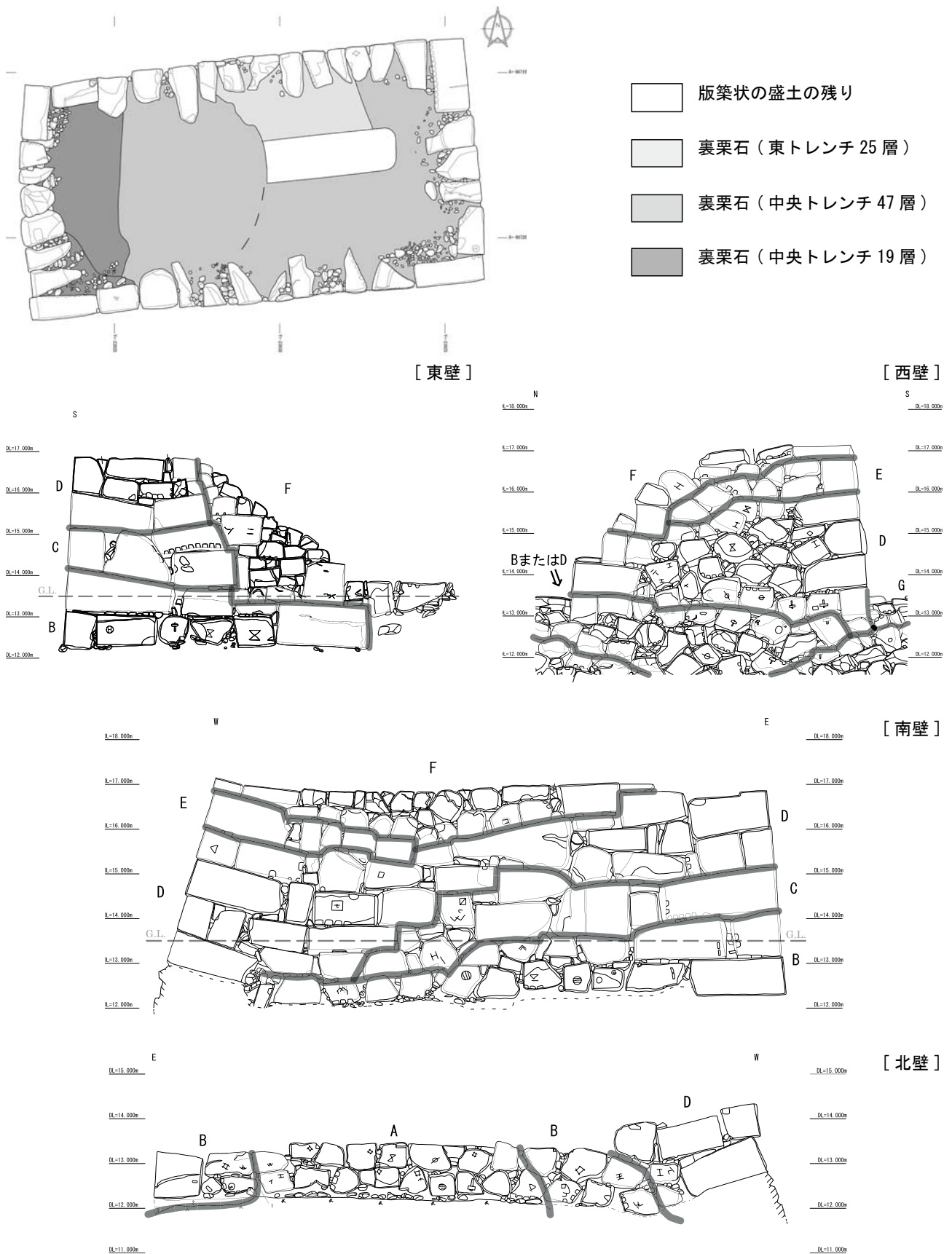


図 11 石垣修築プロセス推定図



なり、横長の直方体状の石材が主に用いられている。

ここでいう石材の二次利用とは採石地で行う加工とは別の、石材を積み際に現地で行われた、あるいは積み直しの際に行われた二次的な加工・再加工、積み直しを示すと考えられる（本来の置き方とは異なる）配石状況をさす。本調査地点では 50 件の二次利用の事例を確認することができた（図 9）。

高田祐吉氏は丁場割図との対比から、調査地点の石材のうち 23 種類について鍋島藩の刻印に、11 種を鍋島以外の大名の刻印に比定する。

最も多く見られるのは井桁文であり、単体で見られるものの以外に他の文様要素と組み合わせ出用いられることもある。次に多いのは違い山形文である。人名や日付を記したものは極めて少ない。

ただし、鍋島家に比定された刻印であっても他の大名の施工箇所においても見られる刻印が存在する。調査地点の石材に施された刻印の中でも最も多い「井桁文」は福島正則、稲葉典通、山内忠義、加藤清正、黒田長政の丁場においても見られる。「違い山形文」は浅野幸長、前田利常、池田輝政が担当したとされる石垣石材においても見られる。

乱積み石垣では、本来、石材を積んだときに外から見える位置、すなわち石面にあたる位置に施刻するのが一般的と考えられるが調査地点の石材ではこれが当てはまらない。特に東面では石面以外の場所に施刻された石材は石面に施刻された石材の 4 倍にも及ぶ。

また、鍋島以外の丁場において数多く見られる刻印が、調査地点の石材において確認された。たとえば東壁面の角脇石の根石に施されている「丸に十一」は、前田の丁場において多数見られ、鍋島の丁場においては僅かに見られるだけである。この前田家のものである可能性が高い刻印が根石石材に見られることから改修がなされていると考えられる。

## おわりに

那古野城は、今川氏親によって大永年間（1521～1527）に築かれ、天文元（1532）年に織田信秀により奪取された。信秀の嫡子・信長の居城とされたことから伺えるように、織田家躍進の契機となった城である。この那古野城は、現在の二の丸付近にあったと見られる。幕末に記された『金城温古録』の「御城取大体之図」に古城域が示されている。近年の発掘調査で、中世那古野城

の遺構として紹介されているものの多くは、名古屋城三の丸遺跡でみつかったものであり、二の丸からはやや南へ離れている。発掘調査が三の丸遺跡一帯に集中し、本丸・二の丸周辺での調査事例が少ないことにも起因するが、本丸、二の丸での那古野城に伴う遺構の報告は三の丸のそれと比較して少ない。中央トレンチ 70 層以下の盛土、つまり築城期のものと思われる盛土中からは、中世以前の遺物だけが出土する。このことから地山に掘り込まれた遺構は、中世・那古野城にともなう遺構であることも考えられるが特定するにはいたらない。

盛土部分および石垣周辺の発掘調査からは『名古屋城普請町場請取絵図（写本）』に記されたように四方を石垣で囲まれた往時の姿を確認することが出来た。表面観察、発掘調査、石材調査から得た知見はいくつかの問題を提起する。

まず修築工事が過去に複数回行われたと思われること、石目の中には連続した線として捉えることができるものがある。さらにそのうちの幾つかは背土の変化にも対応している。西側部分での大掛かりな盛土が見られたこと、地山が西側で確認できなかったことの背景には、単に旧地形や構築法を反映しているのみならず、地震による石垣の崩落や地すべりが起きた可能性も考えられる。

出土遺物から見ると、北側斜面の下部を埋めていた暗褐色砂質土（西トレンチ 12・13 層、東トレンチ 13 層）から第 2 次大戦中に二之丸に駐屯していた歩兵第六連隊で使用された陶磁器がまとまって出土している。第六連隊の駐屯は明治 21(1888) 年に開始されており、この土層が形成された時期が限定される。14 層以下については最下層の遺物と大きな違いはなく、名古屋城の築城以降明治 21 年以前としかいえない。このように石垣が修築された時期については、出土遺物など手がかりの少ないため根拠は希薄であるが、A とした部分は、築城時の石垣である可能性は高い。B～E については江戸期であり、F～H は、廃城となった後の修築と考えるのが妥当であろうか（図 11）。

## 参考文献

- ・高田祐吉 1999『名古屋城石垣の刻紋』続・名古屋城叢書 2
- ・高田祐吉 2001『名古屋城－石垣の刻印が明かす築城秘話』文化財叢書第 95 号、名古屋市教育委員会
- ・高田祐吉 2002『名古屋城石垣災害・補修一覧』名古屋市教育委員会・名古屋城管理事務所
- ・伊藤雅乃・木村有作・酒井 中・高田祐吉 2006「特別史跡 名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事 発掘調査報告書（元御春屋門跡地点の調査）」名古屋市教育委員会